

# 地域活性化を目指し、化学肥料から地元産肥料へ

北海道大野農業高等学校 水稻班 班長 杉林 星 他6名

## 背景

私たちの住む北斗市は農業、漁業の第1次産業が基幹産業です。また、1658年に道内で初めて稲作が行われた北海道水田発祥の地です。また、北斗市を含む道南は函館をはじめとし観光業も盛んな地域です。

そんな地域で私たちは、北斗市生まれの道南育ちのお米「ふっくりんこ」を多くの人に食べてもらいたいと安全安心と共にお届けできるように活動しています。



水田発祥の地碑

## 地元で製造した肥料を使い化学肥料使用量削減

今年で2年目の取り組みです。肥料高騰などの状況から、食料システム戦略も意識し、北斗市の生ゴミなどの有機物から製造した「かんとりスーパーみらい」（未来環境社製）を、元肥のみ窒素成分で50%使用し栽培を試みました。この取り組みで下（図1）のようなサイクルが完成しています。

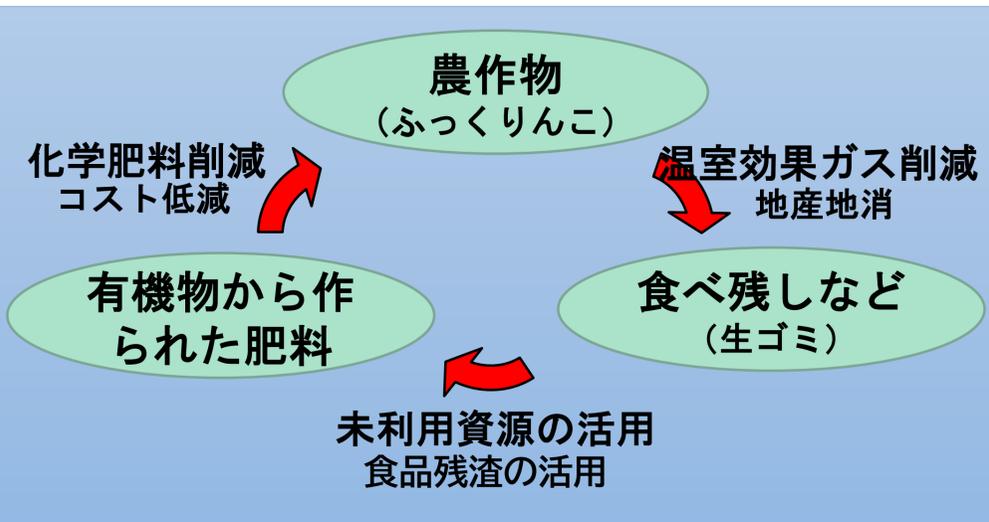


図1

有機物から作られた肥料のため初期生育不良や食味の低下など心配されましたが、2年目の今年も、高温の状況（表1）が続き生育状況も慣行区と変化無く収穫をむかえることが出来ました。来年以降も高温が予想されております。2年間問題なく使用できたため、これからも十分に使用できる肥料であると考えました。

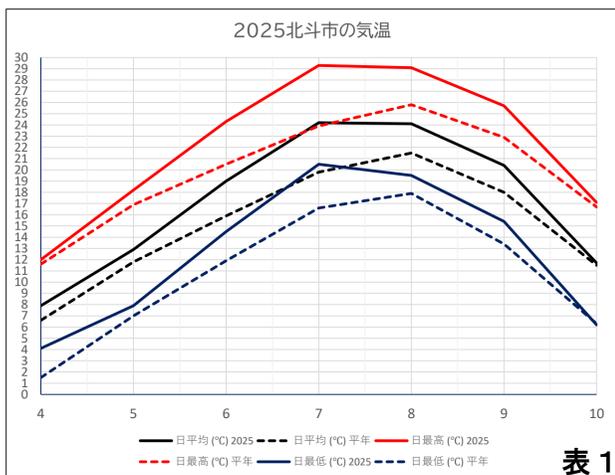


表1

## 天日干しでの乾燥（はさ掛け）

13年前より穀物乾燥機による乾燥でなく、天日干しによるはさ掛けでの乾燥を少量ですが実施しています。取り組みのきっかけは、食味を向上させより美味しい付加価値のついたふっくりんこを食べてもらいたいというのが始まりでした。



天日乾燥（はさ掛け）

## 高温障害防止

昨年は心白米が多く2等米となり収量も減少してしまっただけでなく、今年は最高気温が25°Cを超え始めた6月から掛け流しでイネを冷やし始めました。その結果心白米も減少し（表2）製品としての収量も増加、1等米とすることが出来ました。



その結果心白米も減少し（表2）製品としての収量も増加、1等米とすることが出来ました。

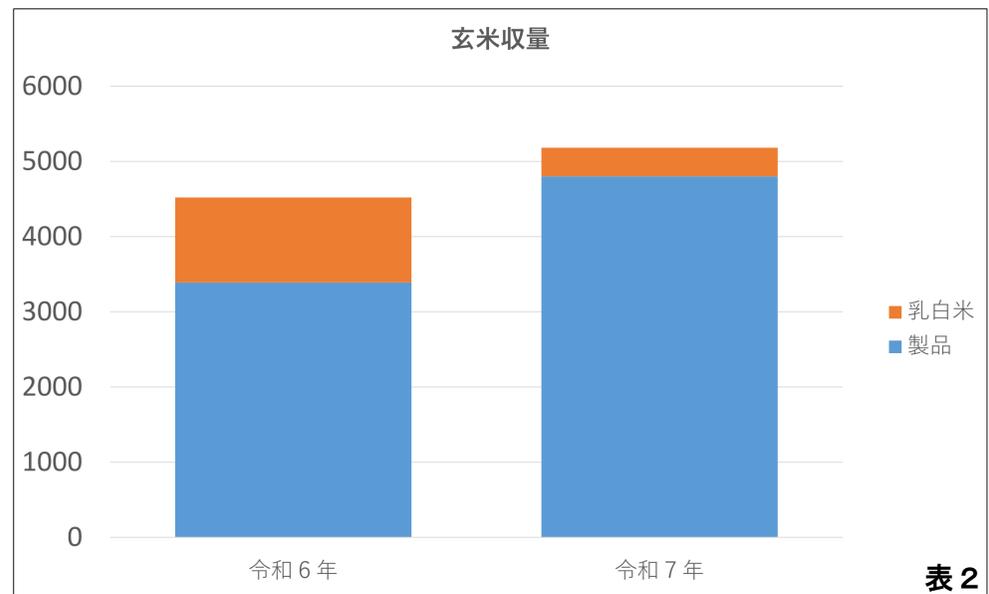


表2

## まとめとこれから

2年間の使用でこの地元産肥料の水稻栽培での使用は経費の削減もあり、十分に可能と考えています。また、暑さ対策として掛け流しにより品質収量も維持できることがわかりました。しかし、温室効果ガス削減として水稻栽培における中干しの延長があります。今年は掛け流しのためほとんど中干しは出来ていません。

これから収益向上、品質収量の維持・向上、と共に環境への取り組みもおこなわなければなりません。私達ははさ掛けをはじめとした付加価値の向上での収益向上、環境への取り組みを両立させなければなりません。

そして自分たちの産業だけでなく地域の他産業も含めた環境を考えたサイクルの完成が私たちの目標です。

